

戦時中の体験を聞く会

共催：東松山市

語り手 なかじま 中島 すずえ 寿々江 さん

演題『広島での原爆体験』

【プロフィール】

1934(昭和9)年 広島県住吉町生まれ。

1945(昭和20)年 広島県の大州(爆心地より3.6km)に家族と引っ越した後、被爆。

1973(昭和48)年 埼玉県に移住。

2006年に所沢市の小学校で講演を始めて以降、現在でも所沢市や入間市の小中学校などで「広島被爆の語り部」として被爆体験を語る活動を精力的に実施。

【お話の内容】

原爆が落とされた地点(爆心地)は広島を中心地であり、アメリカ軍が原爆の威力を確かめるために計画的に狙ったものであった。その爆心地から1km先の国民学校(現在の小学校)に友達と通っていた。

国民学校6年生になると、友達は集団疎開によって広島から離れ、自分はおばのところへ個人的に疎開することとなり、友達と離れ離れとなった。その後まもなく道を広げ、空襲の被害をおさえるために建物疎開が実施された。自分や友達の住んでいた家も建物疎

体験を聞く会の様子



母親と弟は父親の仕事の関係で高知に住み、自分は祖母とお婆の3人で学校近くの狭い家で暮らしていた。1945(昭和20)年7月、高知での焼夷弾空襲をきっかけに父親たちが広島に戻り、月末には両親と暮らすこととなった。

8月6日の朝は、暑く、雲ひとつなかった。突然空がピカッと光り、地響きと爆風がすごかった。目の前が見えるようになると、父親はガラスが刺さり、血だらけになっていた。家の外にでると、斜めに傾き、窓ガラスは砕ごと吹っ飛んでいた。顔や体が真っ黒で、焼けただれた肌が垂れ下がった人々が、水を求めて歩いていた。

夕方になると、その日の朝、外で鬼ごっこをしていた6歳と9歳のいとこが、けがや火傷もなく元気な様子で逃げてきた。しかし4・5日後に、「苦しい」と言いながら畳の上を転がり続け、死んでしまった。この時のいとこの声は今でも耳から離れない。いとこはどんなにやりたいことや希望があったらどうかと考えると切なくなる。

これからの時代、もし何かあれば広島は何千倍もの威力と言われる核兵器が使われる。皆さんとともに平和を目指し、平和な世界を築くために1人1人が何らかの働きができれば良いのではないかという思いで、自分の体験を話させてもらっています。